HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	「文明」がやってきた ： パプアニューギニア・クボの場合(<特集>共同研究報告 ： 近代日本における文化・文明のイメージ)
著者	須田，一弘
引用	北海学園大学人文論集，6：153-166
発行日	1996-03-31

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

「文明」がやってきた
――パプアニューギニア・クボの場合――

須　田　一　弘

はじめに

近代日本において「文明」という語が意味していたのはまずもって欧米の白人文化であったといっても，それほど間違いはなかろう。もちろん，「文明」という語をどのように定義するかによって，その意味するところは少なからず変わるだろうが，幕末から明治にかけての近代日本が積極的に取り入れようとしていたのは，西洋の近代科学や合理主義であったろう。近代日本において，「文明」または「文化」といった語が何を意味し，どのようなイメージを人々に与えたのか，そしてそれは，どのような過程を経て形成されていったのかというメインテーマに関しては，共同研究「近代日本における文化・文明のイメージ」の研究代表者や研究分担者の論考に譲ることとして，この小文では，白人による西洋文化が意味するところの狭義の「文明」について，別の角度から考えてみたい。

明治期以降，日本に暮らす人々は西洋「文明」を取り入れることによって，その生活様式を大きく変えてきた。これはなにも衣食住だけにとどまらず，日本人の世界観や宇宙観などの観念的な部分まで影響を及ぼしている。だが，これは日本に限った現象だけではない。現在，世界中の多くの地域で，それぞれの社会のユニークな生活様式すなわち文化が，西洋「文明」の影響で大きく変化しつつある。こうしたことを考えると，世界的規模で進行している「西洋化」現象は，そもそも西洋文化の異文化との接し方自体の問題であるようにも思えてくる。

いうまでもないことだが，15世紀に始まる「大航海時代」以降，西洋列強はその版図（植民地）を広げる過程で，様々な社会･文化と接してきた。こうした異文化との接触は，ルソー等に代表される啓蒙思想を始め，西洋の近代思想に大きな影響を与えた。しかし，それ以上に，西洋文化はそれ以外の異文化に多大な影響を与え続けてきたのである。

近代における西洋の異文化観は，進化主義の影響を色濃く反映するものであった。植民地拡大の過程で接することになった様々な異文化をどのように理解したらよいのかという問題に対して，人類の起源の単一性に基づいて，一本の進化史的連続線上に様々な社会・文化を配列することで答えを見いだそうとした。そして，もちろん西洋文化がその頂点に位置することになる。しかし，文化進化または社会進化の思想は，ダーウィンによる生物進化論の影響を受けて生じたものではない。「種の起源」出版以前に，社会科学者であるスペンサーやバッハォーフェン等の著書に社会の進化や「適者生存」等の記述がみられるなど，進化主義イデオロギーは近代(19世紀）ヨーロッパの普遍的時代精神といってよい。むしろダーウィンは，19世紀ヨーロッパの進化主義的潮流の影響のもとに生物進化論にたどり着いたといってもよいかもしれない。

ただし，ダーウィン流の生物進化論の観点からいえば，文化進化論は二重の意味で間違っている。まず，ダーウィンの生物進化論は種の進化を問題にしている。その意味からすれば，生物学的に単一種である人類の集団内多様性を，進化の段階の差異と見なすことはできないのである。次に，進化の道筋は単一ではなく，それぞれの種の生息する環境やそれまでの進化のプロセスによって多様なものとなる。ヒトとキリンを比べて，どちらがより進化しているかといった設問はナンセンスなのである。したがって，多様な文化を一直線上に並べ進化の優劣を論じることは，ダーウィン流進化論からすれば，意味のないことになる。

いずれにせよ，19世紀ヨーロッパの異文化観は，西洋「文明」をその頂点とした進化の直線上に多様な社会・文化を配列することを基本としていた。この構図のもとでは，「文明」に対置されるのはアフリカやオセアニア，

南北アメリカ大陸の「野蛮」もしくは「未開」な社会・文化ということになるのである。

進化主義的文化人類学の代表的な著作「古代社会」(1958) を著したモーガンは，その中で世界中の多様な社会・文化を野蛮・未開・文明の三段階に大別した。ここで文明社会とそれ以外の社会を区別するメルクマールに文字の使用と国家形成をあてている。また，「文明」を意味する英語である〝civilization〟は，ラテン語で「都市」を意味する〝civitas〟や「市民」を意味する〝civis〟に関連した〝civilis〟にその起源をもつとされ，都市または国家をもつ社会が，「文明」の範疇に入れられていた。〝civilization〟の訳語である「文明」もまた，「野蛮」や「未開」と対置せられる語であり，「開かれて明るい」というイメージを呼び起こす。

野蛮または未開な社会は，相応の時間がたてば西洋社会と同じく文明の段階に達するとされたが，進化の速度を速めるためには，最高の段階に達している西洋文明がそれらの社会を正しく導くことが必要であると考えられた。そして，この考えは西洋列強の植民地獲得とその経営を支持することになったのである。いっぽう，西洋文化に行き詰まりや違和感を感じた人々は，その倒立像としての野蛮または未開な社会をことさら美化することにもなった。ポリネシア社会を「地球最後の楽園」というイメージでとらえようとすることなどは，ルソーの「高貴なる野蛮人」以来のこの伝統を受け継ぐものであるといえる。

オセアニア地域は，マゼランやクック，ブーゲンヴィル等の多くのヨーロッパ人探検家によって「発見」され，植民地とされてきた歴史を持っている。西洋「文明」との接触により，これらの社会ではほとんどの場合何らかの文化的軋轢が生じた(サーリンズ，1993)。このうちメラネシアではニューギニア沿岸部や島嶼部を中心に，19 世紀末から，世界の大異変とともに白人の所有する缶詰や衣服などの工業製品（カーゴ）を船に満載して自分たちの祖先が帰還するという預言に端を発したカーゴ・カルトと呼ばれる宗教・社会運動が生じた。預言を信じた住民は，カーゴと祖先の到来に備え，プランテーションでの労働を放棄したり，畑の破壊や家畜である

豚の大量屠殺を伴う儀礼を行って，行政当局や白人に敵対していった。しかし，運動自体は預言の不実現や行政当局の介入により短期間で沈静化することが多かった。このカーゴ・カルト運動は，白人やキリスト教との接触，植民地統治に対するメラネシアの人々の積極的な反応と考えることができる（ワースレイ，1981)。

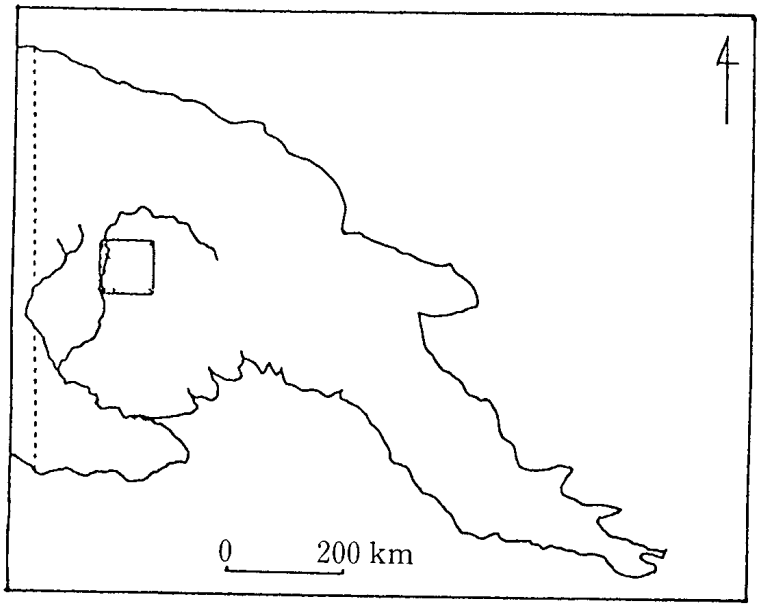
また，西洋「文明」との接触が比較的遅かったニューギニアの内陸社会でも，それぞれユニークな対応がみられた。ニューギニア内陸部の諸社会が西洋「文明」と接触をはじめるのは，オーストラリア人などの白人による探検熱が盛んになった20世紀半ばになってからのことである（Connolly and Anderson, 1987 Sinclair, 1988等)。もちろんそれ以前にも，すでに西洋「文明」と接触を行っていた沿岸諸社会から，伝統的な交易を通じて鉄製の斧などの「文明の利器」がもたらされたり，白人がニューギニアに持ち込んだインフルエンザなどの伝染病に感染し多くの人々が死んでしまったりということはあったが，白人と直接に接触するようになるのは，今世紀の半ばのことであった。以下では，パプアニューギニア西部州内陸部のクボと呼ばれる人々が，西洋「文明」とどのように接触してきたかを，人々の側の対応に焦点をあてて見ていきたい。

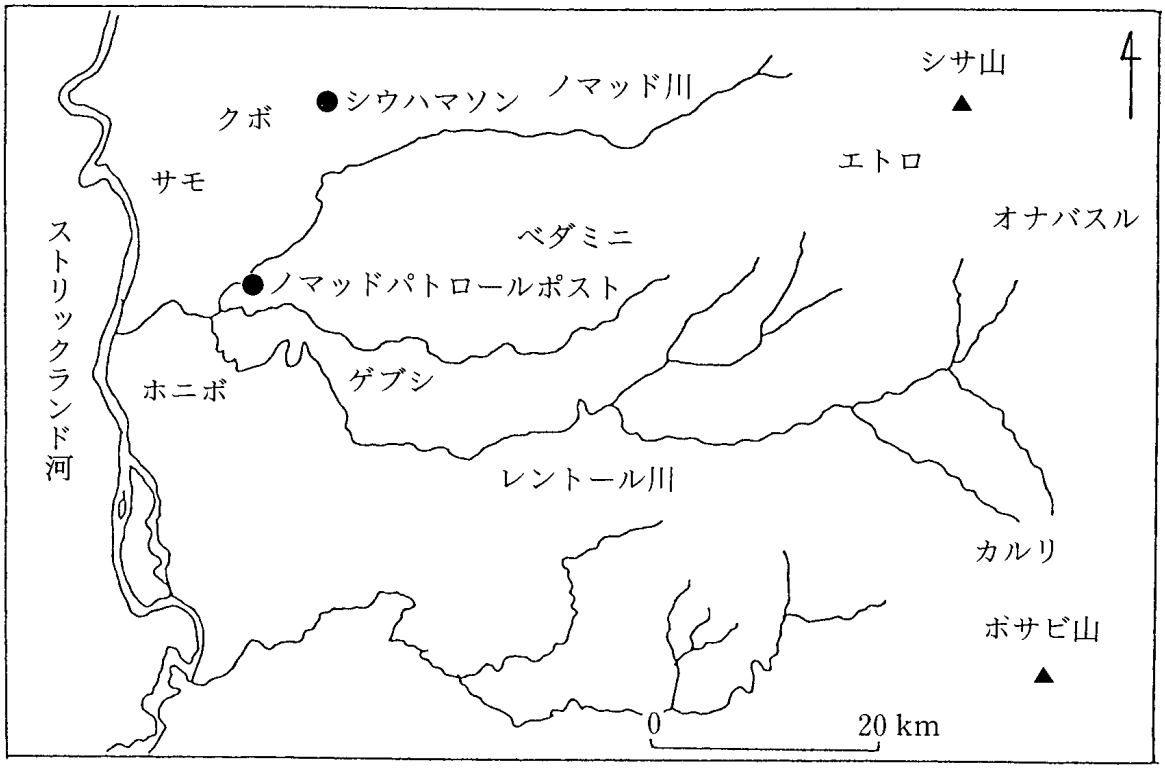
クボ社会

クボ族はニューギニア島のほぼ中央，ストリックランド川流域に広がる熱帯雨林（標高100－200 m）に住む（地図)，移動式農耕とサゴデンプン作り，狩猟，漁撈，採集を主たる生業とする人びとである(須田，1995)。生計維持は周囲の環境に強く依存しており，ほぼ自給自足の生活をおくっている。人口は500～1,000人と推定されるが，北部にはいまだに政府と定期的接触をしていないグループがあり，正確な数字はつかめていない。クボ族の居住地の周辺のストリックランド川東岸からボサビ山麓にかけては，類似の言語を使用するサモ族やベダミニ族など18集団，約12,000人が暮らしている。これらストリックランド・ボサビ地域の各集団は，伝統的に

は数家族からなるロングハウスで生活していたこと，社会組織が父系をたどる親族集団に基礎を置いていること，政治的にはリーダーのいない平等社会であったことなどの社会的文化的特性を共有している。

1930 年代から，植民地政府や石油採掘会社によるこの地域への探検が行





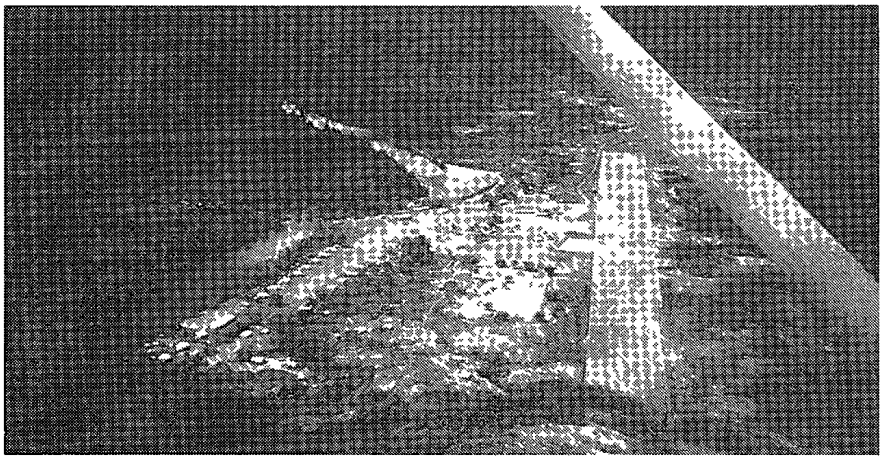
地図 1　クボ集団の位置

われたが，クボ族が外部の社会と恒常的に接触を持つようになったのは，1961年にストリックランド川支流のノマッド川南岸に政府のパトロールポストが置かれてからである。植民地政府はここを橋頭堡に周辺集団の宥和と定住化政策を進めた。その結果，ノマッド・パトロールポストに近い南部のクボ族はそれまでのロングハウス単位での生活から，いくつかのロングハウスが集まって，より大きな定住的な集落を形成するようになった。私が調査したシウハマソンはノマッド・パトロールポストの北東約15 kmに位置する，クボ族の8つのロングハウスが集まってできた集落で，110人前後が生活していた。

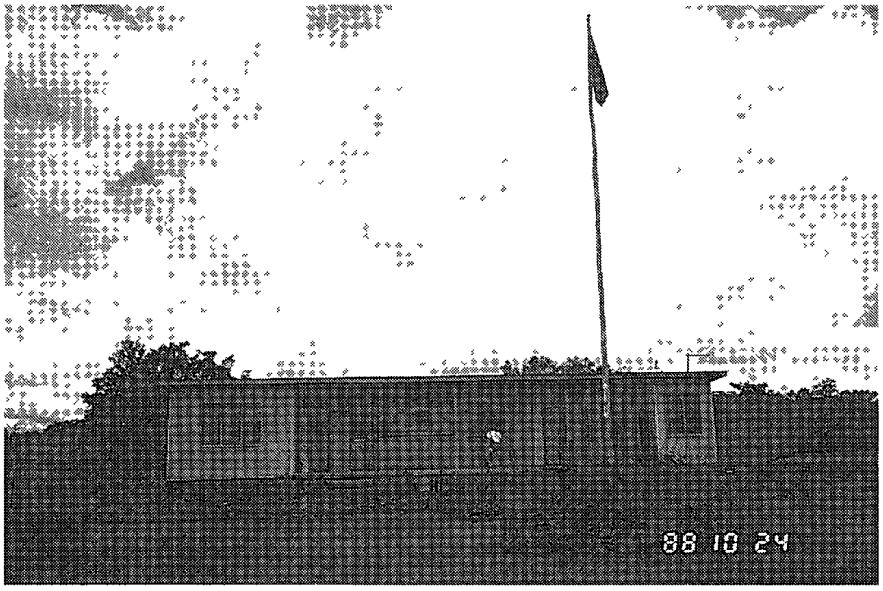
クボ族の基本的社会集団は核家族だが，その上位には父系リネージ（オビ）があり，これが外婚単位となっている。かつては，5～6家族が一つのロングハウスを形成し，焼畑のサイクルや利用できるサゴヤシに合わせて移動生活を送っていた。各ロングハウスは通婚や通過儀礼時の訪問等によって，他のロングハウスと社会的紐帯を形成していた。しかし，ロングハウス内でしばしば女性や資源をめぐる葛藤が生じたり，また，隣接するベダミニからの襲撃により，成員が殺されたり，伝染病で成員が死亡したりすることがあり，こうした要因によって頻繁にロングハウスの離合集散が繰り返された。離合集散はクボ族の範囲を越え，サモやベダミニからの移入やそれらへの移出も少なくない。

「文明」との出会い

クボをはじめとするストリックランド・ボサビの各集団が初めて白人と接触したのは，ニューギニア生まれのオーストラリア人探検家ジャック・ハイズによる1935年の探検行の際であった。ハイズらは，当時白人にとって未踏の地であった大パプア台地の探査を目的として，フライ川の支流であるストリックランド川をさかのぼり，その源頭部からプラリ川源頭部を踏破して再び沿岸部へと下った(ハイズ，1970)。ハイズは，ストリックランド川中流域から上流にかけては無人地帯であると思っていたようだが，



ノマッドパトロールポスト周辺



ノマッドパトロールポスト

ストリックランド川のさらに支流から高地へと進むうちに，ストリックランド・ボサビのいずれかの集団と出会うことになった。この出会いは，ほんの一瞬のことであり，探検行の記録にもその後高地で接触することになったフリ族とのような詳細な記述は残されてはいないが，定住せずに遊動（nomadic）生活をおくっているというストリックランド・ボサビの人々に対するハイズの印象が，そのままこの地域の地名となり，ここを流れるストリックランド川の支流はノマッド川と名付けられた。

ハイズが接触した集団はクボではなく，ノマッド川の周辺に住むホニボかゲブシ，もしくはベダミニと思われる。というのも，クボの側にハイズ

との接触をうかがわせるような伝承は残っていないからである。したがって，クボが初めて白人と接触するのは，1961年にノマッド川南岸に植民地政府の出張所（patrol post）が設置され，周辺集団の管理と宥和が図られてからと思われる。出張所には2，3人の白人行政官（patrol officer）が常駐し，周辺地域への巡回を通じて，植民地政府への帰順と定住集落の設置を促した。そして，その目的は，ニューギニアの中でもっとも未開で生活水準が低いストリックランド・ボサビの各集団に，西洋「文明」を受け入れさせ豊かな暮らしに導くことであった。

当時，植民地政府に武力を持って抵抗していたのは，周辺集団中最大の人口を有するベダミニであった。ベダミニから幾度となく襲撃を受けていたクボは，白人行政官の巡回を友好的に受け入れたようである。白人行政官のすすめやベダミニからの襲撃に備えるため，南部に居住するクボは1970年代半ばから，それまでの数家族からなるロングハウスでの移動生活から，家族毎の住居からなる定住的集落を形成するようになった。私が1988年と1994年に暮らしたシウハマソンも，このようにして形成された集落である。

ノマッドの政府出張所に常駐していた行政官は，1975年のパプアニューギニア独立によって白人が行政職から撤退するのに伴い，白人からパプアニューギニア人に代わっていった。これらニューギニア人行政官は，高地や沿岸部出身者が多く，行政に関わる教育を受けた人々であった。言い換えれば，西洋「文明」を身につけたニューギニア人であり，白人行政官とクボの関係は，そのままニューギニア人行政官とクボの関係に置き換えられたのである。すなわち，すでに「文明」を受け入れた地域出身のニューギニア人行政官は，未開で遅れたクボの人々が「文明」を受け入れ，豊かな暮らしができるように教え導くことを業務の主たる目的としたのである。パプアニューギニア政府は，ノマッドの出張所の周りに，周辺地域で暮らす住民へのサービスとして学校や保健所を設立し，また，貨幣経済の浸透を図り，あわせてノマッドに派遣された教員，役人等の食物の確保のためにローカルマーケットを開いた。このようにして，10年ほど前にはロ

ングハウスすら見られなかったノマッド政府出張所の周囲には各種施設が建てられるようになり，それをめざして周辺から人々が集まるようになった。現在ではノマッドには白人は居住していないが，周辺集団の人々にとっては，ここが西洋「文明」と接する結節点となっている。

また，植民地政府の出張所設立に少し遅れて，キリスト教プロテスタント系各宗派の宣教師がこの地域で布教をはじめるようになった。キリスト教各宗派は，ストリックランド・ボサビ各集団の呪術的な行為や儀礼を改め，キリスト教への改宗をもとめた。それと同時に，小学校や小さな商店を設立し，教育の普及と衣服や米，缶詰などの商品や貨幣経済の浸透を図った。これもやはり，神を知らぬ未開の原住民を正しく教え導き，「文明」を受容させて豊かな暮らしを彼らにもたらすためとされたのである。

シウハマソンには，サモやベダミニの集落よりかなり遅れて，1970年代後半に，いわゆるキリスト教ファンダメンタリスト系のセヴンスデイ・アドヴェンティスト派（ＳＤＡ）のニューギニア人宣教師がやってきた。宣教師は集落での布教と同時に，利発そうなデュサヨという名の子供を南部高地州の都市タリへ連れて行き，ＳＤＡ の教えとともに初等教育と英語を学ばせた。教育を終えて集落に帰ってきたデュサヨは，ＳＤＡ への改宗とともに教育の必要性を説き，それ以降クボの子供もノマッドの小学校に就学するようになった。1988年の調査時には村人の約半数にすぎなかったＳＤＡ はその後勢力を伸ばし，1994年には9割以上を占めるに至っている。

クボにとっての「文明」

シウハマソンに住む30歳以上の人々は，白人との初めての接触，すなわちファーストコンタクトを経験している。行政官の報告ではきわめて友好的な接触であったかのように記録されているが，彼らによると，ファーストコンタクトはそれなりに緊張したものだったらしい。白人行政官の到着に備えて，各ロングハウスでは女性や子供を森の中に隠し，成人男性のみが対応にあたった。それも，話の進み具合によっては，いつでも弓矢を射

てるように準備をしながらであった。というのも，当時のストリックランド・ボサビの集団間関係は良好なものとはいえず，絶えず他集団からの襲撃に怯えながら生活をしていたからである。姉妹同時交換婚や成年式の通過儀礼を通じて友好的な関係を築いていない者，すなわち外部の者は直ちに敵とみなされ，襲撃の対象となることが多かった。クボにとっての主たる敵は東に住むベダミニであり，行政官の巡回の目的が植民地政府に抵抗するベダミニの征討であることが，クボと白人行政官との接触をどちらかといえば友好的なものにさせたといえる。私自身も，2度の調査で親しくなった老人から，「もしおまえが20年前に集落にやってきたらたちまち殺されていただろう。平和な時代に出会えてお互いに幸せだ。」と言われたことがある。

肌の色が白く，髪の毛が縮れていない白人を初めて見たクボの人々はその姿形に少なからず衝撃を受けた。とくに，肌の白さは死者をイメージさせるからである。また，白人行政官がもたらした「文明」の利器も，クボの人々にとっては驚きであった。とくに，行政官が携帯した無線機から声が聞こえてきたときには，無線機の中に小さな人が入っていて，その小人が話しているのだと思ったという。

何度かの接触を続けるうち，クボの人々は行政官のすすめに従い，ロングハウスでの生活をやめ，集落を形成するようになる。それと同時に，樹皮製の腰簑をやめて行政官が持ってきた西洋風の衣服を身につけるようにもなった。こうした変化は，明治維新後に日本人がちょんまげと着物からザンギリ頭と洋服へとそのスタイルを変化させたことを思い浮かばせるが，現在でもクボの人々をはじめノマッド周辺の人々に強く記憶されている。

9月15日はパプアニューギニアの独立記念日であり，毎年この日の前後には周辺の人々がノマッドに集まって記念行事を行う。その中に，いくつかのグループが広場で寸劇を演じることがあるが，人々に一番人気があるのは，白人行政官と人々とのファーストコンタクトの再現である。白人行政官に扮する者は，政府出張所に残されている当時のキャリングボックス

を借り，それらしい服装を身につけてパトロールを演じる。パトロールの際に行政官に出会った伝統的な衣装を身につけた数名の男は最初は逃げようとするが，ピストルをつきつけられその場にとどまるように要求される。その後，白人役の演者は，身振り手振りで住民役の演者にシャツとズボンを身につけるようにうながすが，住民役はそれが何か判らない様子で，石鹸を食べてみたり，ズボンをシャツと間違え両足の部分に両手を通してはみるものの頭が出てこず当惑した振りをする。そのたびに白人役は住民役をこずいたり蹴ったりする。そして，周りを取り囲みこの寸劇を見ている人々は，腹を抱えて大笑いをするのである。

白人行政官が住民に対して寸劇に見られるように強圧的に接していたかどうかは定かではないが，少なくとも人々がこのように感じていたのは間違いない。この寸劇を住民達が演じること，そしてそれを人々が見て大笑いすることは，クボの人々と「文明」との関係を考える上で，きわめて象徴的であるように思われる。さらに，人々とともにそれを見て，なにかしら複雑な思いを感じながらも人々とともに笑っている私自身をその中に加えると，ことはいっそう複雑なものになってくる。

キリスト教の受容

クボにとっての西洋「文明」のもう一つの大きな柱は，キリスト教である。そして，前述のようにシウハマソンではそれがファンダメンタリストであるＳＤＡ を意味している。ＳＤＡ では新約聖書のみならず旧約聖書に書かれていることも，一字一句遵守しなければならないとされている。そのため，旧約聖書のレヴィ記に書かれている食物規制を守ることが求められる。すなわち，ひずめが分かれていないもの，反芻しないもの，水の中にいてひれとうろこのないもの，羽があって四つ脚で歩くすべての這うもの，すべて地にはう這うものなどが，食べてはいけないものとされる。ところが，クボが暮らすニューギニア熱帯雨林においては，重要なタンパク源である動物はほとんどすべてこのカテゴリーに含まれるのである。タ

ンパク源としてもっとも重要な豚やクスクスなどの有袋類は反芻をせず，また，ナマズやウナギ，手長エビ，ザリガニなど主要な水産資源はうろこやひれがないために食べることができなくなる。さらには，蛇やトカゲ，各種の昆虫やその幼虫も食べることができないものに含まれてしまう。クボのまわりで食べても良いものは，ニワトリや野鳥，小魚だけになってしまうのである。

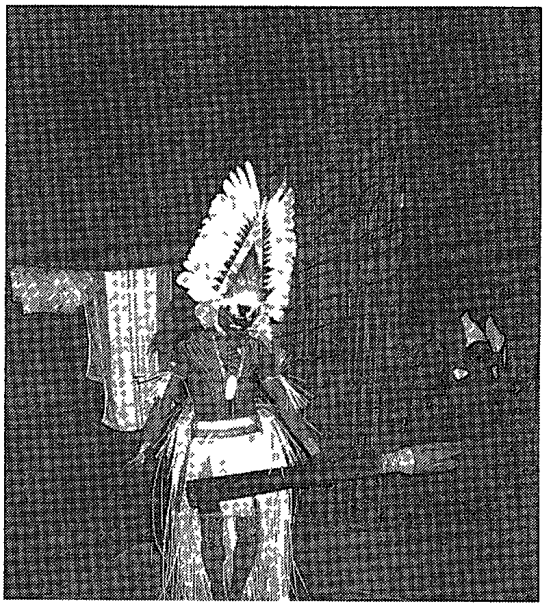
私にとって驚くべきことに，ＳＤＡに改宗した人々はこれらのものをまったく食べなくなる。それだけでなく触ろうともしなくなる。そのために，シウハマソンではニューギニアでは普遍的な豚飼養もやめてしまったし，飼い豚の供犠を伴う成年式も行われなくなった。その結果，現在ではタンパク摂取量も極端に減少している。旧約聖書には，食物規制がどうして生じたのかについては詳しく書かれてはいない(谷，1989)。神の言葉として人々は無条件で従わなければならないのだが，これをクボの人々に守らせるためにはかなり上手な説得が必要だと思われた。シウハマソンでのＳＤＡのリーダーであるデュサヨにその点を確かめると，ＳＤＡがアメリカで出している英語で書かれた小冊子を持ってきてくれた。それによると現代人は動物性タンパク質を摂り過ぎており，レヴィ記の食物規制を守るのは理にかなったことだそうである。もちろん，そのような説明で人々が納得するわけはないし，クボの食環境とアメリカのそれとは大きく異なっている。クボではむしろタンパク不足が案じられるのである(Suda, 1993)。

後に明らかになったが，デュサヨが人々に説いていることは，そしてそれはデュサヨがニューギニア人宣教師から教えられたことでもあるのだが，これらの動物が夜行性であるため，それを食べると人間も夜に寝られなくなるということであった。あるものを食べるとその特性が食べた人にも影響するという，いわばアニミズム的な信仰が，彼らの旧約聖書の食物規制を支えているのである。

キリスト教がやってくる前のクボの宗教的世界は，精霊と呪術への信仰に基づいたものであった。クボのコスモスは，彼らが暮らす可視の現世と，彼らにとって不可視の精霊の世界からなっており，二つの世界は互いに影

響しあって存在するというものであった。クボの死は，精霊の力を借りた呪術によるものか，その呪術師への制裁しかありえなかった。また，成年式や病気の治癒儀礼などのクボの儀礼は，すべて精霊との交感によって成り立っていたのである。キリスト教はこれら一切のクボの伝統的信仰を捨て去ることを強要し，唯一神に帰依することを強制してはいる。伝統的儀礼を捨て去ってしまったこと，食物規制や教会でのサービスなど信仰の表層をみると確かにキリスト教が浸透しているように思われるが，彼らの世界観のすべてを変えたとは今のところ思えない。彼らはキリスト教の影響を受けつつも，いまだに精霊の存在や呪術を信じながら暮らしているのである（須田，1995）。

ＳＤＡでは，黙示録に依拠しながら西暦1999年にこの世の終わりがやってくると人々に教え不安感をあおり，それが改宗に拍車をかける結果となっている。さながら，カーゴ・カルトの再来のような気がしないでもないが，それまでのクボの世界観と終末を預言された世界観とを，彼らがどのように折り合いをつけていくのかは，人類学的関心のみならず遠来の友人としても関心を持たざるをえない。西暦2000年にもかの地を訪れ，友人達がその後のキリスト教「文明」とどのようにつきあっていくのかを，ぜひともこの目で確かめたい。



成年式では伝統的衣装を身につけた男が夜通し踊り，精霊と交感した

引用文献

Connolly, B and R Anderson
1987 First Contact, New York Penguin Books

Morgan, L H（モーガン）
1958 ［1877］『古代社会』 青山道夫訳，東京：岩波書店
(Ancient Society)

Sahlins, M（サーリンズ）
1993 ［1985］『歴史の島々』 山本真鳥訳，東京：法政大学出版局

(Islands of History)

Sinclair, J

1988 Last Frontiers, Queensland Pacific Press

Suda K

1993 "Socioeconomic Changes of Production and Consumption in Papua New Guinea Societies", *Man and Culture in Oceania*, 9 69-79

須田　一弘

1995 「生態と社会変化」,秋道智彌,市川光雄,大塚柳太郎編,『生態人類学を学ぶ人のために』 京都：世界思想社

谷　泰

1989 「ノアの子孫の食卓」,『季刊人類学』20巻4号

Worsley, P（ワースレイ）

1981 [1957] 『千年王国と未開社会』 吉田正紀訳,東京：紀ノ国屋書店(The Trumpet Shall Sound)